3 競技者育成プログラムの理念

みなさんの中には、子どもたちのスポーツ指導にあたっている方も多いことだろう。子どもたちの夢は大きく希望に満ちている。その子どもたちをはじめ広く私たちにスポーツの魅力、醍醐味を実感させてくれるのがトップアスリートたちの活躍だ。ここでは、個人が生涯を通じてスポーツを楽しむために、さらにはオリンピック競技大会のような国際舞台で活躍する競技者の育成に向け、一貫指導システムの理念を中心に指導者の役割を考えてみたい。

1 日本における競技スポーツを取り巻く環境

1）わが国の競技成績

わが国の夏季オリンピックでの競技成績は、1964年開催の東京オリンピックでピークを迎え、1976年のモントリオールオリンピックまでにそれまでの国際競技力の備蓄をほぼ消化し、その後1988年ソウル大会以降2000年シドニー大会まで長期に低迷してきた。2004年アテネ大会では、メダル獲得数を最多としたものの、特定の競技においてメダル数が増えたにとどまったという印象が強く残った（表１、図１）。

2）少子高齢化と生活様式の変容

わが国は、2025年までに65歳以上の人口が約30％を占めると予測されており、超高齢社会も目前となっている。また、2009年の国民一人あたりの年間実労働時間は、2000年と比べて120時間も減少し（OECD調べ）、相対的に自由時間が増大したと考えられる。さらに、わが国の年間医療費が36兆円を超える健康問題などを背景に、国民の生活様式の変容と国民生活の中でスポーツ全般の果たす役割が大きくなった。

3）学校部活動の衰退と競技スポーツ離れ

2009年のわが国の中学校体育連盟加盟生徒数は、2004年のそれと比較して５万人（日本中学校体育連盟調べ）、2011年の高等学校の運動部活動部員数は、2003年のそれと比較して6.6万人（高等学校体育連盟調べ）減少している。また、運動部活動離れの現象は、サッカー、水泳、体操、テニスなど一部スポーツを対象とした民間スポーツクラブあるいはスポーツ少年団によって補完されていることも考えられるが、相対的に中・高等学校生徒の競技スポーツ離れが進んでいる事を意味する。こうし

表1●オリンピック競技大会NOC別金メダル獲得推移

		USA	GER	KOR	FRA	AUS	ITA	CAN	GBR	JPN
	大会名	米国	ドイツ	韓国	フランス	オーストラリア	イタリア	カナダ	英国	日本
1960	ローマ	34	12	0	0	8	13	0	2	4
1964	東京	36	10	0	1	6	10	1	4	16
1968	メキシコシティー	45	14	0	7	5	3	1	5	11
1972	ミュンヘン	33	33	0	2	8	5	0	4	13
1976	モントリオール	34	50	1	2	0	2	0	3	9
1988	ソウル	36	48	12	6	3	6	3	5	4
1992	バルセロナ	37	33	12	8	7	6	6	5	3
1996	アトランタ	44	20	7	15	9	13	3	1	3
2000	シドニー	39	14	8	13	16	13	3	11	5
2004	アテネ	35	14	9	11	17	10	3	9	16
2008	北京	36	16	13	7	14	8	3	19	9
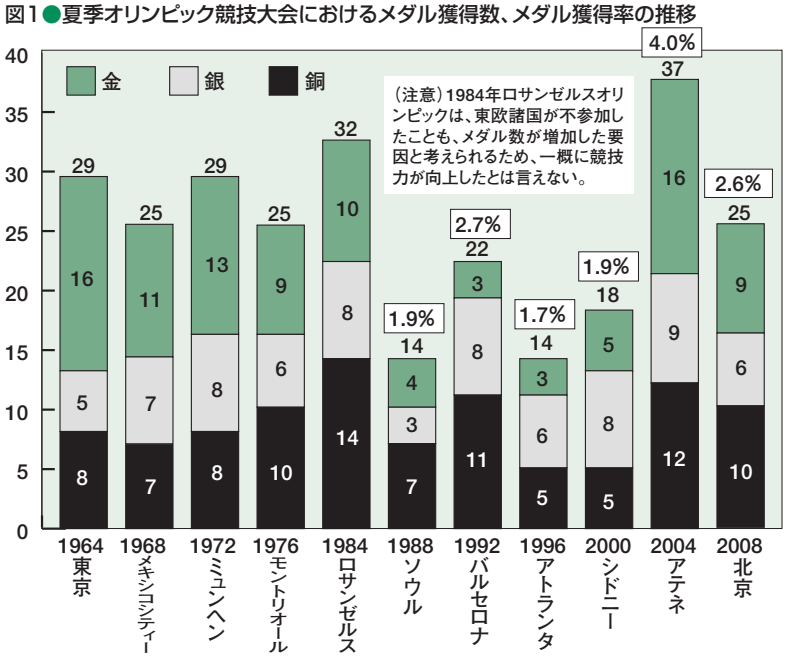
図1●夏季オリンピック競技大会におけるメダル獲得数、メダル獲得率の推移